

## 開催趣旨

## 沼津と富士の原風景を探る

～ 本企画の開催趣旨にかえて ～

木村 聡  
(沼津市教育委員会)

## 1 はじめに

沼津市や富士市を紹介するとき、どういう言葉を使うだろうか。例えば沼津市のHPを見ると、「首都100キロメートル圏に位置する静岡県東部にあって恵まれた自然環境と優位な地理的条件のもとで、東駿河湾地域、伊豆方面への交通拠点あるいは広域的な商業・文化拠点として、古くからこの地域の政治、経済、文化の中心的役割を担ってきました」とある。では、この「中心的役割」はどの時代までさかのぼることができるのか。人によって、いくつかの回答はあろうが、考古学の立場からは、現在の中心市街地に大規模な遺跡が展開し始めた時期、すなわち今回テーマとして扱う「奈良時代」が、現在の沼津市や富士市の原風景を作り出した時期と提示したい。

奈良時代とは、古墳時代が終わりを迎え、代わって法と仏教で国を治めていた時代である。行政単位として、沼津市北部には駿河国駿河郡、富士市には駿河国富士郡が成立する。両郡の役所や寺院などの文化・経済・政治の中心は、現在の市街地とほぼ重なるように展開していった。

では次の問いは「なぜここに郡が成立したのか」ということであろう。それを読み解くキーワードのひとつが「川」である。

## 2 川は要地をつなぐ道

自動車が主な交通手段となった現代において、河川交通を用いて移動をした経験を持つ人はあまりいないであろうが、かつて川は重要な道のひとつであった。奈良時代ではそれ以前の時代よりも水運の発達があったと考えられ、郡の中でも中心的な施設は、川の近くに築かれることが多い。これは駿河郡や富士郡も例外ではなく、主要陸路である東海道と川との結節点に文化・経済・政治の中心地が発達した。現代ではやや川から離れる道もあるが、国道1号（東海道）と国道136号（狩野川沿い）、国道246号（黄瀬川沿い）、国道52号（富士川沿い）などの道が両市の物流を支える主要街道となっていることはこの地で暮らす人にとっては改めて述べることもないだろう。

ただし、「川はいつだって存在していたではないか」、「河川交通はそれ以前でも使われていただろう」、という反論もあろう。確かにそのとおりで、古墳時代にもそうした道の利用がなかったわけではない。それでも原風景を奈良時代と設定するのは、駿河国の中心に展開した駿河郡の遺跡立地に理由がある。

富士郡の中心地は古墳時代でもある程度遺跡が展開するが、駿河郡の中心地はあまり遺跡が展開していなかった場所である。つまり奈良時代になって、狩野川沿いという新たな場所に郡の中心が成立する点に特徴がある。これは、伊豆方面への水運をより重視したことを示唆するもので、古墳時代以前に存在していた物流の在り方が奈良時代に変化を迎えているものと捉えておきたい。

### 3 駿河郡と富士郡の共通点や相違点を探る

環境が沼津市・富士市の形成に大きく影響を与えているという考えは理解しやすく、一見納得してしまうような考えである。しかしこの考えは、あくまで主催者（のひとり）が抱いている仮説であって、具体的な資料に基づき、まだまだ検証すべき項目が多くあると考えている。今後の遺跡の調査によっては見当はずれのことを言っている可能性もあるが、現段階の資料を用いて沼津市・富士市の原風景がいかなるものであるかを具体的に検討することは無意味なことではないと考え、今回の企画を進めた。

講演会は沼津市内で実施しているが、昨年度に引き続き、研究を先行する富士市との共催である。昨年度は「山」をテーマに愛鷹山に約 1000 基も展開した古墳群について扱ったが、古墳群の中心が現在の両市の市境にあったため、行政区分を取り払って両市の学芸員が「愛鷹山南麓の古墳群および集落」という同一の視点で遺跡を見ることで、愛鷹山の古墳群全体の特徴を抽出することができた。詳細な成果は本書目次下の二次元バーコードから講演会動画を見ていただきたいが、今回は古代東海道と巨大な河川によって形成されたという共通点は持つものの、駿河郡と富士郡という距離が離れた 2 つの中心地を比較検討し、その特徴を把握することを目的としたい。

ただし、この目的を達成するためには、地域の考古資料だけでは不十分である。奈良時代は文字資料が残る時代であり、これらを見捨てることは得策ではない。考古資料と文献史料を組み合わせることでより詳細な様相を検討することが必要である。そのため、講師として日本古代史・宗教史を専門とする三舟隆之氏に全国的な視野を踏まえた駿河国の様相についてお話しいただくよう、依頼した。また三舟氏は現在、古代食研究の一環で、駿河国・伊豆国から貢納されていたカツオについても研究を進められている。駿河国と都がどのようなつながりを持っていたのか、様々な視点から解説いただく予定である。そして三舟氏の講演後は、沼津市富士市から遺跡調査成果を紹介する構成となっている。

少なくとも沼津市ではあまり取り上げられていない時代の講演会であるが、両市における発展の素地は奈良時代には確実に存在している。そんな思いを込めて、タイトルには「原風景」と入れ込んだ。今回の企画が皆様の足元を見直すきっかけとなれば、企画者として幸いである。



図1 富士郡・駿河郡の主要遺跡分布図



写真1 狩野川から沼津市中心市街地を望む